

公表

児童発達支援事業所における自己評価総括表

○事業所名	児童発達支援 はぐみープラス			
○保護者評価実施期間	2025年3月1日 ～ 2025年 3月22日			
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	3 8 名	(回答者数)	2 1 名
○従業者評価実施期間	2025年2月28日 ～ 2025年3月14日			
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	5 名	(回答者数)	5 名
○事業者向け自己評価表作成日	2025年4月1日			

○ 分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	スタッフ一人ひとりが、専門性を持ち、真摯に療育を行っていること	感覚統合、応用行動分析、PECS、言語認知プログラム、9つのアプローチ法等を学び、一人ひとりに合ったオリジナルプログラムの療育を行っている。	PDCAサイクルを行いながら、常に療育内容を振り返り、より適切な療育を提供する。スキルアップの学びを継続し続ける。
2	「保護者の応援団」という理念のもと、保護者の思いを理解しようとする姿勢を大切に保護者の方に並走していること	子どもの思いとは別に、保護者の思いも大切にしている。労いと、保護者の方の思いをイメージし、保護者の方が少しでも心が軽くなるお手伝いをしている。	支援者自身を整え、保護者の思いに適切にこたえながら、共に歩んでいく姿勢を大切にしていく。
3	スタッフ同士、お互いの違いを認め合い、自分自身を見つめようとしていること	交流分析や気質学等の研修を通して、人と自分は違うことを理解している。否定的に感じたことは己を振り返り、気づきを得ることを大切にしている。	自分が見えている世界は、自分自身が作っているということがもっと腑に落ちていくように、心理的な学びを取り入れていく。

	事業所の弱み(※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	言語聴覚士・作業療法士・理学療法士という専門職がいないこと	現在は療育スタッフが専門知識をカバーするよう努力しているが、医療的視点や機能訓練の観点での支援に限界がある。	専門職との外部機関連携の強化と個人の専門性をさらに高めていく。
2	活動スペースが一部屋となっている	療育を行う活動スペースが一部屋に限られており、複数人が同時に活動する場面では、子どもが集中しづらくなる、刺激に過敏になることがある。	今後もパーテーションや棚等を活用し、子どもにとって見通しのよい「自分の活動スペース」を視覚的に確保していく。また、音の出る活動と静かな活動を同時に行わないなど、活動内容の組み合わせに配慮していく。